



福島県各地に、  
全国から様々な形の応援が寄せられています！  
そんな頼れる皆さんからのメッセージをお伝えします。

## 福島へのラブレター



音楽家  
谷川 賢作さん  
(東京都在住)

福島の人たちとの交流が、ここ数年どんどん深まってきた矢先の3/11。悔しくてなりません。私にできることは、今後も福島に足を運ぶことです。9/19にはいわきアリオスホールでの「わくわくキッズミーティング」に参加しました。画家のあべひろしさんと子どもたちが描いた大漁旗を持って元気よく館内をパレードしました。翌日はいわき中央台北小学校にて、久之浜第一小学校との合同コンサートに参加しました。子どもたちの明るい笑い声が忘れられません。音のラブレターを持って、今後も福島に行きます！よろしくお願いします。



フリーランス通訳翻訳者  
アーヴィング・ラウケさん  
(ドイツ在住)

はじめまして。大学で日本語と英語を勉強し、日本に4年間住んできたドイツ人です。

震災の後、自分にできることを探し翻訳ボランティアを始めました。この通信の英語版にも関わっています。実は一度も福島県を訪れたことがありません。しかしがニュースに福島のことが出ると、今まで通信に出てきた様々な人々のことが思い浮かびます。

子どもたちを守るために放射線量の安全基準の設置など、世界中で声をあげていかねばなりません。遠く離れて福島のことを他人事ではなく、自分とつながりがあると考える人が世界中にもっと増えればと思います。

## リレーエッセイ

### 人ととのつながりが大切な命線です

フリーナウンサー 唐橋 ユミ



この世は無常なのだ。心のなかで何度も言い聞かせられる日々が続いている。東日本大震災から8ヶ月が過ぎました。福島で育った私にとっては、東京電力福島第一原子力発電所事故の収束が見えない間は、ずっと震災が続いている気持ちです。今回の大震災で、ラジオの力が見直されています。幾度となく繰り返される津波の映像よりも、自分の欲しい情報を手に入れたいという人たちがラジオに耳を傾けました。私は、今まで、あの時ほどマイクが欲しいと思ったことはありません。正確な情報をすばやく伝えたいと。慌ただしく時間が過ぎる中、リスナーさんからのメールやファックスで一番多かったのが、いつもの声を聞くことができて、安心しました、ほっとしました。というもの。この時、どれだけいつも通りが大切なのか、必要であるかが身にしました。

震災後、1日だけお休みをいただいて、福島に行くことができました。馴染みのある福島市内の餃子店。東京から来たテレビクルーが、近くで中継をしていたが、突然、「ここ、やばいですよ！...やばい」と言い残し、その日に急いで帰って行った。でも主人は、詳しい情報は知られていなかったので、何がどれだけやばいのか、不安が募るばかりだった。しかし、数日後からテレビで放射線量の数値を知られ、落胆した。自分たちは、来てくれるお客様がいる限り、店を閉めるわけにはいかない。朴訥で口数少ないと主人が声を荒らげる姿に、私はくやしさ、怒り、せつなさが混じり合いました。「でも...」とご主人。「目に見えないっていうのはほんとに怖いですね」小さな声で強く訴えていました。飯館村にいた両親を福島市に呼び寄せ、小さな家を買い、住み始めた人は、「なんであの歳になってから住み慣れた土地を離れさせなきゃなんねんだろう...」と。やり場のない想いを感じました。失っても自分たちの力で取り戻せるものはある。でも、身体を蝕む見えない恐怖に対しては、いくらがんばっても、またいつ一瞬にして積み上げたものを壊されるかわからない。どうがんばればいいのか。答えが見つからない中、前へ進み始める速度は人それぞれです。人生観が変わったという人も多い。私は震災後、改めて実感しています。言葉の重みです。数ヶ月が経ち、それぞれが持つ情報の格差がはっきりと出始めています。テレビだけ、新聞だけ、また、それだけでは信用できないことが明らかになり、他の媒体から情報を得る人。そんな中で、自分と違う考え方を持つ人を攻撃し合い、そこで言葉を失ってしまう事があると耳にします。自分の能力で処理できないことに対しては思考停止状態になるといいますが、言葉を失っては、理解し合うことも前に進むこともできません。理解しあう事は、労力のいることですが、今、人の痛みを想像できる言葉が必要です。

阪神淡路大震災では、高齢者の多い仮設住宅で、閉じこもりがちなお年寄りが多かった。そこで、世話を立て、皆が集まるコミュニティールームを作つてお茶会を開き、少しずつ言葉を交わしていく。すると、いろいろな要望が出てきた。次第に、お年寄りの声なき声をまとめる自治会のようなものができる、自発的に言葉を交わし、前へ進んでいくようになったということです。また、ボランティアが懸命に動いてくれているのを見て、ありがたいけれど、なかなか口に出せないことがある。それは、感謝しているけれど、欲しいのは仕事だということ。少しでも人のためになっているという充足感を求めています。目線をそろえ、触れ合い、言葉を交わす、人ととのつながりこそが、大切な命線です。心の復興は時間がかかります。いつになるのかわかりません。ただ、この世が無常であるなら、怒りの涙、くやし涙、むなしくせつない、悲しみの涙が、一粒でも、うれし涙に変わる日が来る信じています。

[プロフィール] 唐橋 ユミ(からはし ゆみ)

喜多方市出身。元テレビユー福島アナウンサー。現在はフリーナウンサー。ラジオ「吉田照美ソコダイジナトコ」、TBS「関口宏サンデーモーニング」、NHK「名医にQ」、テレビ東京「広告の番組」に出演中。

## ボランティアの皆さんへ

### 一人ひとりのまちづくり —神戸市長田区・再生の物語—

◎著者: 中和 正彦 ◎出版社: 大日本図書株



ボランティア  
関連図書の  
紹介

ISBN: 9784477019307

1995年の阪神・淡路大震災で壊滅的な被害を受けた神戸市長田区、その後のまちづくりの中で重要なコンセプトとなった「つながり」や「ユニバーサルデザイン」。このふたつのキーワードを軸に、実際に多くの実在の人物への丁寧な取材を基に書かれた一冊です。

震災前からの絆。震災後生まれた萌芽のような「つながり」。偶然と必然が積み重なった「ユニバーサルデザイン」との出会い。町を再生、再建するためには自分も含めた多くの人が関わることが大切なだと知らせてくれます。

実話を基に描かれたこの一冊は、東日本大震災で被害を受けた町、建物、暮らし、心の再建にも活きてくるのではないかでしょうか。

## こんにちは、生活支援相談員です！

大熊町社会福祉協議会／会津若松市社会福祉協議会

大熊町より避難をして11月で早8ヶ月になりました。現在、大熊町社会福祉協議会の生活支援相談員5名と、会津若松市の生活支援相談員3名が一緒に訪問活動を行っております。

2人1組の4班体制で各班に会津若松市出身の相談員に入ってもらい、大熊町出身の相談員だけでは分からず道路事情、周辺の生活

情報等を教えてもらいながら仮設住宅や借上げ住宅の訪問活動を行っております。

これから冬場を迎える、避難されている方々はますます厳しい環境で生活をしていかざるを得ません。私たちの活動で、それらが少しでも緩和されればと思いながら今後の訪問、支援活動に努めていきたいと考えております。



後列左から 星良樹、板橋清介、三瓶幸恵、佐々木香澄、伊藤健一  
前列左から 河副由紀子、酒井瞳、柄本あけみ

### 編集後記

もうすぐ師走。2011年も残りあと1ヶ月となりましたが、一人でも多くの人が前向きな気持ちで新しい年を迎えることができるよう、復興の歩みをさらに前進させていきましょう。(伊藤忠伯)

がんばろう、日本。  
がんばろう、東北。



最新情報はホームページで  
ご覧ください！  
<http://www.pref-f-svc.org>

がんばろう、福島。

次号は12月19日発行です。